

「ソウル・サーファー」

評者・前島 常郎

母親から「人魚」と呼ばれるほどの根っからの波乗り少女ベサニー。からだは乾いているよりぬれている時間のほうが多かった。サーファーになると決めていた。親友のアラナ（ロレイン・ニコルソン）と夜中に家を抜け出して、家族に内緒でナイト・サーフィン

……。行って出会った一人の幼子だった。傷心の「人魚」に気を取り直させたのは、大津波で被災したタイのプーケット島にボランティアに行つて出会った一人の幼子だった。……。

またコンテストに出たいと言う

最後のクレジットのところで公開されるベサニー・ハミルトン本人の豪快なサーフィンが圧巻。

「私は、私を強くしてください。方によって、どんなことでもできるのです」（ピリピ4章13節）

●ストーリー

ベサニー（アナソフィア・ロブ）がイタチサメに襲われたのは、2003年13歳のときである。舞台はハワイ。ベサニーの両親は、ともにサーファー。家族は海辺に住んでいる。

からだの60%もの大量の血液を失ったにもかかわらずベサニーは一命を取りとめた。しかし、再びボードに乗る気力を取り戻すのは、並大抵のことではなかった。ようやく練習を再開し、コンテストに出てみたものの、波に巻き込まれてボードを壊し、すっかりやる気を失ってしまふ。

タイの津波被害地の様子は、東日本大震災の惨状を思い出させる可能性もある。



6月9日 全国ロードショー
2011年 アメリカ映画
配給 トライスター・ピクチャーズ
監督 ショーン・マクナマラ
出演 アナソフィア・ロブ、ヘレン・ハント
原作 ベサニー・ハミルトン
『ソウル・サーファー』
文庫版 172ページ
出版社 ソニーマガジズ



ベサニー・ハミルトン本人



を楽しむことも。

ある日、兄たちと友人アラナの家族といつしよにサーフィンを楽しんで

13歳の娘が片腕を失うという災難は、家族全員の痛みになる。

ハワイを舞台にしたサーフィン映画なので、水着姿の女性が多数登場する。それを売り物にした作品ではないのは確かだが、男性の誘惑になる可能性は否定できない。

自分の悲劇から励ましを受けたという世界中の若者たちから便りが届いたことも、ベサニーにはうれしい驚きだった。

●お勧め理由

美しいサーフィンのシーン満載なのが何よりの魅力。思春期の友だちの大切さ、けんかど仲直り、ライバル心、そしてスポーツマンシップとは何かを考えさせる。また、信仰の面でも家族で語り合えるきっかけを与えてくれる。

ふたりの兄たちもベサニーの味方だ。練習風景をビデオに収めては、家族でチェックする。聖書のことばも勇気を与えてくれた。「私は、私を強くしてください。方によって、どんなことでもできるのです」

●あえて言うならば

「どうしてこれが神のみこころなの？ 分からない！」

ベサニーがサメに襲われる場面（短時間）、また救出のシーンなどは、幼い目にはショッキングであろう。

●おまけ

最後のクレジットのところで公開されるベサニー・ハミルトン本人の豪快なサーフィンが圧巻。